

研究 (原著)

乳児院多職種チームによる子どものニーズの
共通理解の質的検討西田 英子¹⁾, 相良 順子²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、乳児院の多職種チーム（乳児院チーム）が子どものニーズを共通理解しながら支援するプロセスを明らかにするため、関東近郊の乳児院 8 施設に勤務する保育士・看護師・家庭支援専門相談員・里親支援専門相談員・心理職 26 人を対象としてインタビュー調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析を行った。結果、乳児院チームはまず、保護されて今ここで育つ子どもを支えるため、日常生活支援における共通理解を行い、それをもとに子どものこれからの見据えた試行錯誤によって、今後の支援方針を見出す共通理解を行っていた。その土台には、充実した話し合い環境と各メンバーのチームを成長させる力があり、結果として乳児院による支援の表明に至ることが示された。子ども・保護者・里親のニーズに直接向き合う乳児院では、各職種がそれぞれの代弁者として機能し、その上で子どもの状態に合わせた支援方法を考えることによって、多職種の視点から子どもの安心を基軸とする支援が行われると考えた。また、チーム内で良好な関係を構築し、問題解決に向けて主体的に行動するメンバーの資質の重要性が示唆された。

Key words : 乳児院, 多職種チーム, 子どものニーズ, 共通理解, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

I. 目 的

児童虐待が増加の一途をたどる現在、社会的養護の量・質の拡充が求められている¹⁾。社会的養護の施設である乳児院は、乳幼児の基本的養育機能のほか、被虐待児・病児・障害児などに対応する専門的養育機能を持ち、多職種が配置されている²⁾。多職種から成る乳児院職員のチーム（乳児院チーム）が子どものニーズを共通理解するプロセスは非常に重要と考える。

乳児院には、0 歳から就学前の子どもが措置される。2021 年 3 月時点での在籍数は全国で 2,351 人であり、そのうち 0~2 歳児が 8 割強を占める³⁾。2021 年度の乳児院への新規措置理由は、父母の虐待、精神障害、経済的理由が 7 割を超える¹⁾。保護者の心理社会的ニーズや医療的ニーズ、経済的ニーズといった多様なニ

ーズが存在し、それにともない子どもが受ける影響も多岐にわたると推察される。また、子ども自身の約半数が身体虚弱・病弱、何等かの障害を有し⁴⁾、成長発達のための支援やケアを受けるニーズを持つ。これらのことから本研究では、乳児院の子どものニーズをこうした包括的ニーズとして捉えることとする。近年、社会的養育の充実が目指される中、乳児院に保護される子どものニーズを適切に理解することは一層困難になることが予想される⁵⁾。

乳児院ではこうしたニーズに対応するため、子どもに直接関わる保育士、看護師等の直接養育職員のほか、家庭支援専門相談員（ファミリーソーシャルワーカー、以下、FSW）、里親支援専門相談員（以下、里専）、心理療法担当職員（以下、心理職）等の間接養育職員が配置されている⁶⁾。各職種はその専門性を生かし、情

A Qualitative Study of the Process to Share Common Understanding of Children's Needs by
Interdisciplinary Teams in Infant Homes
Eiko Nishida, Junko Sagara

1) 聖徳大学大学院児童学研究科（大学院生）

2) 聖徳大学教育学部（教授）

[JCH-24-008]

受付 24. 3. 4

採用 24.10.24

報共有してチームとして連携し支援体制を組み⁷⁾、養育支援・家庭支援・里親支援を行う。なお、ここでのチームとは、インターディシプリナリー・モデルの定義⁸⁾を参考に、各専門職がチームの意思決定に主体的に関与し、それぞれの役割を協働・連携して取り組むチームとした。

乳児院チームによる支援では、子どもの慢性疾患や発達の課題、虐待の影響による行動の問題への支援と並行し、家族の生活の混乱や障害、犯罪、家族間の不和等、子どもが育つ上で解決すべき重大な問題に取り組む²⁾。関係機関と連携しながら家庭への引き取りや里親とのマッチング、他施設への移行等、退所後の生活に向けた支援^{9,10)}も行われる。このような、同時的で重層的な支援では多職種チームによる共通理解は非常に重要である。

多職種チームの共通理解を主題とする先行研究は、児童養護施設や病院を対象とした検討^{11,12)}がなされている。一方、乳児院を対象とした先行研究では、職員のチームに対する認識に関する研究^{13,14)}や、一部の職種を対象とした支援の検討^{5,15)}がなされている。このうち、西田・相良の研究⁵⁾では、乳児院保育士による子どものニーズの理解に着目し、チームで多様な視点を共有しながら支え合うことを、保育士が子どものニーズの理解を深める一つの要因として示した。ただし、保育士のみならず多職種による共通理解の内容が明らかにされていないことは、課題として残されていた。したがって、乳児院チームによる共通理解に関する議論は、十分であるとは言い難い。共通理解の形成のプロセスを検討することは、今後充実が望まれる社会的養育の一翼を担う乳児院にとり、専門性の向上に資すると考える。そこで、本研究では先行研究⁵⁾で協力を得た保育士に、看護師、FSW、里専、心理職を新たに対象として加え、乳児院チームが子どものニーズを共通理解しながら支援するプロセスを検討することを目的とした。その方法として、何が起こっていて何が重要なのかを解明しようとする¹⁶⁾質的研究法を採用した。

Ⅱ. 対象と方法

1. 調査期間

調査期間は2021年7月～2022年2月であった。

2. 研究デザイン

乳児院チームが子どものニーズを共通理解しながら支援するプロセスを明らかにするため、ヒューマンサービス領域におけるプロセス性のある社会的相互作用の検討に適しているとされる、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の手法^{17,18)}により分析した。

3. 研究対象者

できるだけ豊富な経験に基づく語りを得られるよう、研究対象者を選定した。2021年4月時点で全国にある乳児院144施設、総定員数3,823人のうち、設置数45、総定員数1,383人と8地方区分の中で施設数定員数ともに最も多く、全国定員数の約36%を占める関東地方⁴⁾にある施設を選択し、その施設に勤務する者を研究対象者の候補とした。そして、選定条件を経験年数4年以上の中堅または7年以上の上級職員¹⁹⁾とした。

4. データ収集方法

各社会福祉法人が運営する乳児院8か所の施設長に研究への協力として選定条件に合う職員の紹介を依頼し、保育士11人、看護師6人、FSW・里専・心理職各3人の合計26人から協力を得た。このうち、保育士11人のインタビューデータは、先行研究⁵⁾と同一のものである。本研究では子どものニーズの多職種チームにおける共通理解という異なる観点から分析を行う。

研究対象者の経験年数は、5年～10年未満11人、10年～20年未満11人、20年～30年未満4人であった。すべてのインタビューと逐語記録の作成は筆頭著者が行った。研究対象者の勤務する施設の個室でインタビューを実施し、多職種チームでの共通理解・連携でよかったこと、難しかったことを尋ねた。なお、一部の施設でのインタビューはオンライン (ZOOM) で行った。インタビュー実施時間は、平均1時間4分9秒であった。インタビュー内容はICレコーダーで録音し、逐語記録を作成した。

5. 分析方法

分析は筆頭著者が行った。逐語記録を読みこんだうえで、分析テーマを「乳児院職員が乳児院チームで子どものニーズの共通理解を重ねながら支援するプロセス」とし、分析焦点者は「乳児院の多職種チームの一

表 1 研究対象者のインタビュー時間・概念数

施設番号	対象者番号	職種	時間	概念数
1	F1	FSW	0:50:22	23
	里 1	里専	0:46:42	16
	心 1	心理職	0:53:42	13
2	保 1	保育士	0:49:04	11
	看 1	看護師	0:28:25	12
3	F2	FSW	0:58:36	21
	保 2	保育士	1:19:05	11
4	看 2	看護師	1:17:37	19
	看 3	看護師	0:58:24	13
	看 4	看護師	1:18:55	14
	保 3	保育士	1:47:38	12
	保 4	保育士	1:15:51	5
	保 5	保育士	1:09:54	10
5	F3	FSW	0:59:55	21
	里 2	里専	0:50:08	20
	看 5	看護師	0:57:21	20
	保 6	保育士	1:08:43	10
6	心 2	心理職	1:02:43	16
	心 3	心理職	1:01:27	20
7	看 6	看護師	0:58:55	13
	里 3	里専	1:05:00	17
8	保 7	保育士	0:59:08	8
	保 8	保育士	0:50:52	11
	保 9	保育士	0:52:36	13
	保 10	保育士	0:50:05	6
	保 11	保育士	0:53:24	3

注) FSW: 家庭支援専門相談員

員として支援に携わる職員」とした。

分析テーマと分析焦点者に照らして逐語録を読み、関連箇所に着目した。それを一つの具体例とし、分析ワークシートを立ち上げて具体例欄に転記した。具体例の意味を解釈し、その内容を理論的メモ欄に記入しながら定義と概念名を作成した。データの他の箇所にも、定義に照らして類似例があれば追加し、その都度、概念、定義、具体例の関係を確認して安定化を図った。また、解釈が恣意的になることを防ぐため、定義に照らして対極例の検討を行った。同時並行で、新たな概念の可能性となる具体例があれば、同じ手順でデータ分析を進めた。23人目の分析以降で新しい概念は生成されず、理論的飽和化がなされたと判断し、データ収集を終了とした。

各概念を完成させていくと同時に、個々の概念間の関係を検討し、結果図に表した。概念同士の比較により、複数の概念から成る関係をカテゴリー、サブカテ

ゴリーとしてまとめた。概念およびカテゴリーの相互比較では、繰り返しデータに戻って妥当性を確認した。結果図を精緻化し、結果図と照らし合わせながらカテゴリー、サブカテゴリーの関係を、ストーリーラインとして文章化した。各協力者のインタビュー時間と概念数は表 1 に示した。

信頼性と妥当性を担保するため、心理学を専門とする大学教授である第二著者と、データの解釈、定義・概念の適切性を継続的に検討した。また、心理学や保育学を専門とする研究者および大学院生 3 人より、分析内容と結果図について助言を受けた。

6. 倫理的配慮

協力施設の施設長と研究対象者に対し、研究に関する説明文書を渡し、研究の趣旨と調査の内容、質問に対する拒否の自由、インタビューデータを研究目的以外に使用しないこと、個人情報保護の厳守、IC レコーダーによる音声記録について説明し、研究協力への同意を署名で得た。逐語記録では、施設名、個人名、施設の特定につながる居室名等はすべて記号表記とした。なお、研究の実施前に、「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会」に申請し、承認を受けた（承認番号：R03U009）。

7. 用語の定義

本研究における用語の操作的定義は以下のとおりとした。

子ども：乳児院に在籍している乳幼児を指す

家族：保護者や里親の総称とする

メンバー：乳児院チームの各職員を指す

養育者：保育士・看護師の総称とする

Ⅲ. 結 果

分析テーマの観点から分析を行い、5つの《カテゴリー》、8つの〈サブカテゴリー〉、27の【概念】を生成し、これらの関係を結果図に示した（図 1）。まず、結果図に沿って、カテゴリー、サブカテゴリーを中心にプロセス全体の動きをストーリーラインにより説明した。次に、カテゴリーごとに構成する概念について、具体例を引用しながら定義に基づき詳述した。なお、具体例は「」で示し、具体例文中の（）は著者による補足文を、具体例文末の（）内は表 1 の対象者番号を表した。

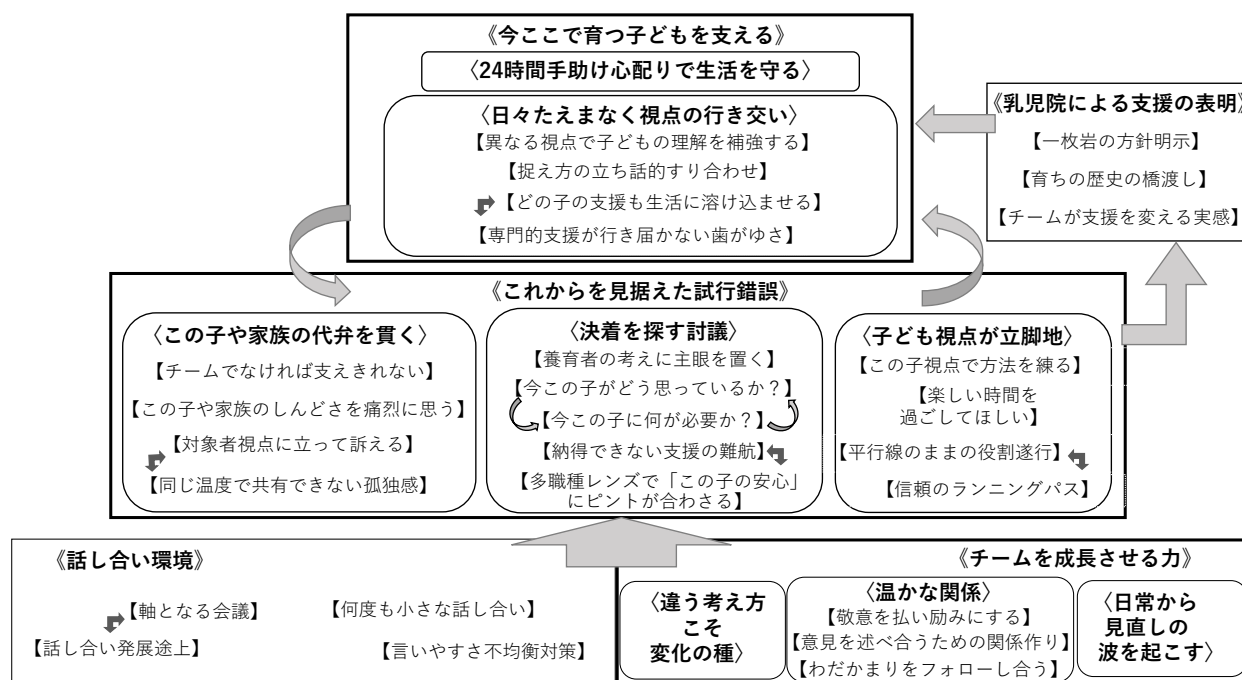


図1 乳児院職員が乳児院チームで子どものニーズの共通理解を重ねながら支援するプロセス
 分析結果として、概念・カテゴリー・サブカテゴリーの関係を一つの図にまとめて示した

1. ストーリーライン

乳児院職員が、乳児院チームで子どものニーズの共通理解を重ねながら支援するプロセスは、保護されて《今ここで育つ子どもを支える》生活支援から始まる。メンバーは〈24時間手助け心配りで生活を守る〉。日常生活で必要となるさまざまな判断や理解、対応を共有するため、各職種間で〈日々たえまなく視点の行き交い〉を行う。生活支援で捉えた子どもの様子や課題をもとに、今ここの対応だけでなく、子どもの《これからを見据えた試行錯誤》を重ね、支援方針を討議する。メンバーそれぞれが、職務の中で子どもや家族の抱える課題の重さを思い知り、その立場に立って〈この子や家族の代弁を貫く〉。そのうえで一定の結論を見出すまで粘り強く〈決着を探す討議〉を行う。子どもにとっての最善を中心に据えて〈子ども視点が立脚地〉とすることができると、チームの支援方針と方法が一致する。こうした過程は、《話し合い環境》と、メンバー一人ひとりの《チームを成長させる力》に支えられる。《チームを成長させる力》とは、〈違う考え方こそ変化の種〉として異なる意見を肯定的に認識したり、他のメンバーと〈温かな関係〉を作り、問題を認知した際には〈日常から見直しの波を起こす〉して、改善に向けてチームへ主体的に働きかけたりする力である。《今ここで育つ子どもを支える》ための共通理解

をもとに、《これからを見据えた試行錯誤》を行った結果は、子どもと家族、関係機関へ《乳児院による支援の表明》としてなされるとともに、《今ここで育つ子どもを支える》支援の、次なる足がかりとなる。

2. 各カテゴリーと概念の説明

i. 今ここで育つ子どもを支える

保護された子どもを乳児院の生活の場で心身共に十分にケアし、よりよい育ちを促そうとする、メンバーの働きのことである。メンバーは、子どもと養育者から成る生活の場の重要性を認識し、常に子どもにとって安心できる場であるように、状況に注意を向け、不具合の整備をし、声を掛け合って〈24時間手助け心配りで生活を守る〉。例えば、昼夜問わず急変する子どもに関し、「荷物はもうひとまとめに救急車呼んだらそのまんま持ってけるようになって（看3）」と備えたり、「いいよ、ここ掃除しとく、片づけとくから子どもとゆっくり関わってあげてって（保6）」と生活全体の安定に目を配る等して助け合う。

また、メンバーは〈日々たえまなく視点の行き交い〉を行う。各職種の立場から子どもを理解する視点を補足し、情報を加えて【異なる視点で子どもの理解を補強する】。例えば、「おうちで泣いたときにうるさいって怒られちゃったみたいで、っていう情報（F1）」

を共有したり、「体を作っていくことだったりとかその子の体力だったり、発達に合わせた何かっていうのを看護の目線から（看1）」提示し、今の支援をより充実させようとする。また「何気ない会話から、じゃどのくらいになったらおうちいけるかね（里1）」など、雑談に近い日常会話の中で、子どもや家族の行動や状況をどう認識しているか、【捉え方の立ち話的すり合わせ】を行う。そして、【どの子の支援も生活に溶け込ませる】ため、メンバー間で教え合ったり話し合ったりしながら、個別的具体的な支援を生活に組み込む工夫を凝らす。例えば「何時だったらアレルギーの子のご飯に集中できるとか、…（中略）…全部ユニットと話し合って（看5）」確認したり、里親マッチング中の子どもが「よりその里親さんとの関係を深めていくために、担当がそのミニアルバムを見ながら、へえ今日こんな事したんだ、楽しそうだったねみたいな会話（里3）」をしてくれるようスクラップブックを作成したりする。ただし、子どもに合わせた専門的支援がもっと必要であるにも関わらず、「足りてるのかな（保2）」「担当の養育者と看護師っていうふうにはんとはね、できれば（看5）」等と【専門的支援が行き届かない歯がゆさ】を感じることがある。

ii. これからを見据えた試行錯誤

子どもの家族背景、特性、生育歴の影響を考えながら、今後この子どもにとってどんな支援が良いのか、支援方針を討議していくことである。メンバーは、それぞれの職務の中で子どもや家族の抱える課題の重さを思い知り、自分も心を揺さぶられたり苦悩したりしながら、対象者の立場に立って〈この子や家族の代弁を貫く〉。メンバーは、疾患・障害や発達の問題、関わりの困難さ等を抱える子どもに伝えようとすればするほど、一人に対応するのは不可能であり、【チームでなければ支えきれない】ことを痛感する。さらに、子どもや家族それぞれの課題の大きさ、一筋縄ではない状況に直面し、【この子や家族のしんどさを痛烈に思う】体験をする。例えば、「（外泊へ）送り出すときとかはやっぱりちょっと辛かったですかね。なんかこう、行かないーっ！みたいな感じになっちゃったりとかして。行かないーっ！とか（保8）」という子どもの葛藤や、「もうほんとに疲れちゃってるんですよ、お母さんも（看5）」と家族の苦しみを目の当たりにする。「最後の最後まで何とかおうちに帰れないのかっていう思いはありましたね。力不足で申し訳

ないというか（保9）」と、メンバー自身も動揺したり、やり場のない辛さを感じたりする。メンバーは、それぞれの支援対象者（子ども・家族）の気持ちや立場を理解し、それを他のメンバーに対してはっきりと代弁し【対象者視点に立って訴える】。例えばFSWは「いやいやお母さん頑張ってるけど、それはもちあわせてない力なんだよ（F1）」と親の視点を、保育士は「（家族にとって）Cちゃんが支えっていうのも、まあわからないでもないから…。でも支えならば、もっとなぜ頑張ってくれないっていう、なんかこう、葛藤です（保5）」と子どもの視点を、里親は「里親さんにとってそれを経験することがどういう感覚になるのか（里2）」と里親の視点を主張しあう。それがなかなかチームに実感として伝わらないと感じるとき、支援対象者の状況が助けを必要としていればいるほど、自分一人で受け止めている感覚になり、【同じ温度で共有できない孤独感】におちいってしまう。

メンバーは、子どものニーズと家族のニーズとを考え合わせ、意見を出し合いながら一定の結論を見出すまで〈決着を採す討議〉を行う。その際、子どもに対し心身共にエネルギーを注ぎ理解する存在である【養育者の考えに主眼を置く】。そのうえで「まず第一は子どもがどう思ってるかっていう、どうしてそうになっているのかっていう状況判断（保3）」のように、子どもの今の状態に注目して【今この子がどう思っているか？】をくみ取ろうとする。同時に、中長期的な支援目標のため【今この子に何が必要か？】を考え、子どもの今の状態に適した支援と、今後の成長に必要な支援を行き来させて話し合う。十分な理解や合意がなされないままになると、疑問や不満が残り【納得できない支援の難航】となってしまうが、子どもの背景と現在、今後の育ちまでを「子どもが安心か」という観点で考え合い、「やっぱりAかBか考えるってなった時に、その中心は子どもでありたい（F3）」と、多職種による【複眼レンズで「この子の安心」にピントが合わさる】と、チームの方針が統合される。

メンバーは、〈子ども視点が立脚地〉として整合性のとれた支援方法を検討する。「子どもがここで遊んで待ってるほうがいいのか、お母さんたちがここにいるところに子どもが入室するほうがいいのか、準備するおもちゃも普段遊び慣れたもの持ってきたほうがいいのか（F3）」等と、どうすれば子どもが安心できるか考え、その子どもにあった方法を具体的に細かく

話し合っただけ【この子視点で方法を練る】。多様な複雑なニーズをもつ子どもと家族だからこそ、乳児院で過ごす時間は安らいで【楽しい時間を過ごしてほしい】と考え、メンバーで協力してきめ細かな工夫や配慮を行う。実践場面で自分の役割をチームの支援として統合する動きに欠けると【平行線のままの役割遂行】におちいるが、他のメンバーが同じ方針のもとにうまく動いてくれ、フォローしてくれると見通しを立てられると【信頼のランニングパス】をするように、お互い任せ合いながら支援を進められる。

iii. 話し合い環境

メンバーが、必要に応じて十分に話し合い、考えをまとめていくための環境である。メンバーは、定期的な会議で話し合う場を持ち【軸となる会議】を開催するが、開催頻度や内容に物足りなさがあり【話し合い発展途上】の状況である場合、改善の必要性を認識する。また定例の会議だけでなく「どうしたらうまくいけるかっていうのを結構、何回もB会議とかで話したり（保5）」と、タイムリーな内容について【何度も小さな話し合い】を持つ。会議では「偏らないようにはしたいですね（心1）」等、チーム内の力関係に注意し、【言いやすさ不均衡対策】として、どんな立場でも主体的に意見を言えるよう心配りする。

iv. チームを成長させる力

より良い支援をチームで実践するために働きかけようとするメンバー一人ひとりの力のことである。メンバーは〈違う考え方こそ変化の種〉として意味あるものと捉える。「それって意識の違いだからそうなるのは。別に悪いわけじゃないよねって（F2）」と、自分の考えと統合して支援に役立てようとする。また、他のメンバーの仕事に対し、「保育士さんは…（中略）…なんかじょうずだなあって。何するにも、その子がホワッとするような雰囲気持ってくるのって（看1）」と【敬意を払い励みとする】。またメンバー同士で、親しさや気の置けないやり取りを心掛け、率直に【意見を述べ合うための関係づくり】を行い、メンバー間で負の感情や考えが生じた際には、【わだかまりをフォローし合う】。このように〈温かな関係〉を作ると同時に、全体的なチーム支援の質に影響するような、メンバーの行動、状況にも常日頃から目を配る。そして問題を認知した場合には、その改善に向けて〈日常から見直しの波を起こす〉。実際の場面で「遊びを見せたり（保6）」して行動で示したり、「そういうのって

いつもどうなってる？って（F2）」と質問を通して課題を示唆したり、「勇気を振り絞って、ちょっと、あのご飯の時なんだけどもさ、みたいなこと（看2）」等、率直に意見したりする。

v. 乳児院による支援の表明

メンバーが、乳児院チームによる支援の意義と役割を理解したうえで、支援対象者や関係機関に意見や支援の説明をすることである。子どもの視点に立ってチーム内で検討した結果を、家族・関係機関に【一枚岩の方針明示】として丁寧に伝える。子どもの退所時には、支援の経過を【育ちの歴史の橋渡し】として「困った頃に読んでもらえるものがあればと思って（保1）」と記録に残し、今後の成長に役立つように家族・関係機関に伝達する。メンバーにとって、チームで共通理解し支援した過程は「毎回出して、話し合っただけ、でもみんなもきっと困ってたから、みんなも真剣に、意見を出し合っただけ、で、やる。やることでたぶんまあ、そうしながら関係は作ってたかなあって（看2）」という【チームが支援を変える実感】を生じさせ、その経験はさらなるチーム支援の向上への動機となる。

IV. 考 察

本研究では、乳児院チームが子どものニーズを共通理解しながら支援するプロセスを明らかにすることを目的とした。結果から、今ここで育つ子どもを支えるための日常生活支援における共通理解、これからの見据えた試行錯誤を通して支援方針を見出すための共通理解、そして各メンバー個人のチームを成長させる力は、乳児院チームの共通理解と支援に中心的機能を果たしていると考えられる。以下ではこの3点を中心に、先行研究と照らし合わせながら考察を試みる。

1. 日常生活支援における共通理解

乳児院は乳幼児を対象とすることから、保護直後の生活支援が、生命の維持および成長の危機回避に直結すると言える。そこで、まず、24時間安定した生活を保障することが重要であり、そのためにメンバー間で日常的に工夫や配慮、調整が行われていることが示された。さらに、子どもの情緒・行動上の問題²⁰⁾への支援や、施設移行等の生活の変化を経験する子どもの心理的支援²¹⁾も、日常生活が中心となる。こうした支援の前提として、どのメンバーも子どもの日常生活の状態に注目し、そこでの具体的な情報共有や、実

践に関わるすり合わせを繰り返し行っていた。この過程が、乳児院チームにとって、子どもの複雑なニーズを理解する基礎であると考ええる。

ただし、実際には専門的支援が行き届かない歯がゆさが生じていた。これは、各メンバーが乳児院の子どものニーズを捉える高い専門性を有しているために生じた問題意識とも捉えられる。多職種チームの課題として指摘されている²²⁾ように、この問題意識は、支援における個人レベル・チームレベル間の齟齬による可能性がある。メンバー個人が発揮できる専門性をチームで生かしきれない状況があるなら、生かせない要因がどこにあるのか、どうすれば改善できるか、議論を深める必要がある。

2. 支援方針を見出すための共通理解

支援方針を見出すために、メンバーは子どもや家族の代弁者として他のメンバーに訴え、時にそれが食い違い、孤独感の体験にさえつながっていた。この現象は、現実の子どもと家族それぞれが抱えるニーズの折り合いのつかなさ、子どもと家族の安心できる生活に向けた解決が、いかに難しいかを体現しているともいえる。小児病棟における実践報告²³⁾では、体重増加不良で入院した乳児の退院先を検討するために、各職種が子どもの価値や家族の価値、医療者としての専門的価値、個人的価値との対立に葛藤しながら、子どもの最善の利益を見いだす過程を明らかにしている。乳児院チームに照らし合わせれば、メンバー自身が苦悩し、チーム内で主張しあうほどに、子ども・家族それぞれの代弁者として機能することこそ、話し合いの中で子どもと家族がつながる道筋を見いだす原動力になると言える。

そのうえで、メンバーは養育者の考えに主眼を置き、養育者を通して子ども自身に改めて目を向ける。それにより、その子どもにとってどのように支援することが適切かという、子どもの視点からニーズを見る構えをとると考えられる。さらに、今この子がどう思っているか？今この子に何が必要か？の問いのもと、子どもの現在の状態から今後の成長というスパンで、子どものニーズに適する支援を見つけ出そうとしていた。いくつかの指摘^{24, 25)}から、ニーズを持つ子どもと家族の支援は、主に家族の変化に着目して行われてきたと推察される。それに関して本結果では、乳児院チームが家族のニーズを子どものニーズとして捉え直し、そ

の子どもに着目した支援を検討することが示された。これは、複雑なニーズを持つ子どもに直接携わり、変化と成長を確認しながら生活支援を行う多職種チームであるためと考えた。子どもの権利を最優先にし原則家庭養育の実現が目指される現在であればこそ、複雑なニーズを持つ子どもを多面的に理解し子どもを中心に据えた具体的な支援を編み出して実践できるスキルを持った乳児院の専門性の向上を追求することは、子どもと家族にとって必要不可欠といえる。

3. チームを成長させる個人の力

乳児院チームによる子どものニーズの共通理解は、より良い支援を志向した各メンバーのチームへ働きかける力も重要であった。看護師のチームワークの検討²⁶⁾では、その一要素としてチーム志向性が見出されており、本結果の温かな関係、日常から見直しの波を起こすこととその内容は重なる。また、認定こども園を対象とした調査²⁷⁾によると、保育者が所属園に対して心理的安全性²⁸⁾を認識していることが、有効な問題解決方略を使うことと関連していた。本結果でもメンバーは、普段から関係作りを行いチームの心理的安全性を考慮しながら、課題を指摘し改善に向けた行動をとることが示された。子どものニーズを共通理解しチームで有効な支援を行うために、こうしたメンバー個人の力は非常に重要である。

4. 今後の課題

まず、今回明らかになったプロセスがどのような要因で促進されるのか、またそのプロセスにおける各職種の特徴や役割はどのようなものなのかを検討することが重要である。さらに、乳児院チームで形成された共通理解が関係機関との連携にどのように生かされるのかについても検討する必要がある。

V. 結 論

乳児院の多職種チームが子どものニーズを共通理解しながら支援するプロセスを質的に分析した。プロセスに関わる要因としては、今ここで育つ子どもを支える支援と、これからを見据えた試行錯誤による今後に向けた支援という二つのレベルでの共通理解を充実させること、また、メンバーとの関係作りやチームの課題の改善を主体的に行うメンバーの力が重要であることが示唆された。

謝 辞

本研究にご協力くださった乳児院の先生方、ならびに結果の分析にあたりご助言をくださった聖徳大学の菊地一晴氏、山上寛子氏、和洋女子大学の佐藤有香氏に深謝申し上げます。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 子ども家庭庁 支援局家庭福祉課. “社会的養護の推進に向けて”. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-f0fd487fbe16/f554b24c/20240216_policies_shakaiteki-yougo_84.pdf (参照 2024.02.28)
- 2) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局家庭福祉課. “乳児院運営ハンドブック”. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-f0fd487fbe16/ddd00bd3/20230401_policies_shakaiteki-yougo_14.pdf (参照 2024.10.26)
- 3) 総務省統計局. “福祉行政報告例”. <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00450046&tstat=000001034573> (参照 2024.03.04)
- 4) 全国乳児福祉協議会制度対策研究委員会. 令和2年度全国乳児院入所状況実態調査全国乳児院充足状況調査報告書. 2022.
- 5) 西田英子, 相良順子. 乳児院保育士による子どものニーズの理解とその支援—M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) による質的分析—. 福祉心理学研究 2023; 20: 37-46.
- 6) 全国乳児福祉協議会. 乳児院の将来ビジョン検討委員会報告書. 2012.
- 7) 全国乳児福祉協議会. 改訂新版乳児院養育指針. 2015.
- 8) 菊地和則. 多職種チームの3つのモデル—チーム研究のための基本的概念整理—. 社会福祉学 1999; 39: 273-290.
- 9) 島田恭子. 愛着をどう育てるか—乳児院での取り組み—. 里親と子ども 2012; 7: 83-89.
- 10) 小幡律子. 乳児院と家族支援. 児童養護 2015; 46: 16-19.
- 11) 若林 亮. 多職種協働の検討—児童養護施設の事例を通して—. 福祉心理学研究 2018; 15: 71-76.
- 12) 鎌田佳奈美. 被虐待児をケアする病棟看護師に生じる認知・感情とその変容をもたらす要因. 日本小児看護学会誌 2014; 23: 18-24.
- 13) 若井和子, 小河孝則. 乳児院における専門職の協働意欲に影響する要因. 川崎医療福祉学会誌 2011; 20: 377-382.
- 14) 西田英子, 相良順子. 乳児院職員のやりがいを高めるチームの認識とは—チーム認識尺度の作成と検討—. 福祉心理学研究 2019; 16: 44-53.
- 15) 長谷川昌子, 横山恭子. 乳児院における養育形態の構造化とその影響. 上智大学心理学年報 2013; 37: 37-47.
- 16) 大谷順子. 質的アプローチを用いた研究手法—健康教育分野への適用—. 日本健康教育学会誌 2014; 22: 177-184.
- 17) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 東京: 弘文堂, 2003.
- 18) 木下康仁. 定本—実践の理論化をめざす質的研究方法論—. 東京: 医学書院, 2020.
- 19) 全国乳児福祉協議会. 改訂乳児院の研修体系—小規模化にも対応するための人材育成の指針—. 2015.
- 20) 犬塚峰子. 虐待を受けて乳児院に入所した子どもの抱える問題とケア. 大正大学カウンセリング研究所紀要 2010; 33: 22-30.
- 21) 河崎佳子. 乳児院での子ども育てと保護者支援. 別冊発達. 32. 京都: ミネルヴァ書房, 2016: pp 224-232.
- 22) 菊地和則. 多職種チームの構造と機能—多職種チーム研究の基本的枠組み—. 社会福祉学 2000; 41(1): 13-25.
- 23) 新井麻美子, 山田咲樹子. 子どもの施設入所を巡る看護師の倫理的葛藤について—医療チームによる関わりから学んだこと—. 日本小児看護学会誌 2011; 20: 65-71.
- 24) 佐々木大樹. 里親家庭支援の現状と課題. 京都大学大学院教育学研究科紀要 2020; 66: 137-150.
- 25) 中谷奈津子, 木曾陽子, 鶴 宏史, 他. 保育所における困難家庭の子どもに対する積極的支援—「福祉としての保育」の再考—. 日本家政学会誌 2024; 75(1): 1-16.
- 26) 三沢 良, 佐相邦英, 山口裕幸. 看護師チームのチームワーク測定尺度の作成. 社会心理学研究 2009; 24: 219-232.
- 27) 小澤拓大, 小川美由紀. 保育観の違いへの対処と保育者の省察および職務満足感の関連—心理的安全性からの検討—. 日本家政学会誌 2023; 74: 169-178.
- 28) Edmondson A. Psychological safety and learning behavior in work teams. Administrative Science Quarterly 1999; 44: 350-383.

[Summary]

In this study, 26 child care workers, nurses, family support counselors, foster care support specialists, and psychologists working at eight infant homes in the Kanto region were interviewed and analyzed using a modified grounded theory approach to explore the process by which interdisciplinary teams working in infant homes to share understanding of the child's needs. As a result, the infant care team first developed a common understanding of daily life support for children growing up in the here and now. Then, the team agreed that future support policies would be based on a trial-and-error approach with an eye toward the child's future. Both the background of these discussions and the ability of each member to encourage the team's growth led to the home's statement of support. In an infant home where the needs of children, parents, and foster parents are directly addressed, each group would have a professional advocate to discuss how to support the child's situation and to help the child feel safe and secure from an interdisciplinary perspective. It also emphasizes the importance of members who build good team relationships and are actively involved in problem-solving.

Key words: Infant homes, Interdisciplinary team, Children's needs, Common understanding, Modified grounded theory approach